

認知文法における「際立ち」の多義性

富岡 侑央

京都大学大学院

tomioka.yukihiro.43e@st.kyoto-u.ac.jp

要旨： 認知文法 (e.g. Langacker 1987, 1991, 2008) の理論的な概念の中には profile/base, figure/ground, trajector/landmark, reference point/target などの様々な二項対立が存在する。これらの対立は前者のほうが後者より際立ち (salience) が大きい要素として特徴づけられる。ところが実際にはこれらの非対称性を動機付ける特性には様々なものがあると考えられ、際立ちという概念がこれらとどのように関わっているのかは判然としない。本稿では際立ちを何らかの言語現象に反映されるための特性として4種類（アクセス性、情動的際立ち、指示的際立ち、文法的際立ち）に分類することを提案する。

キーワード： 認知文法、際立ち、参照点、情報構造

1. はじめに

1.1. 「際立ち」を巡る混乱

認知文法では種々の文法現象の説明に、注意や関心を引く特性である「際立ち」(salience) という重要な概念が用いられている。これは非常に一般的な説明項であり、認知文法に登場する figure/ground、profile/base、trajector/landmark、reference point/target などの様々な対立は、それぞれ前者の際立ちの大きさによって特徴づけられている。ところがこれらの対立に共通する特性は非常に抽象的であり、際立ちという概念が何のために存在するのかは判然としない。本稿ではどのような心理的特性がどのような言語形式に反映されるかという観点から認知文法における「際立ち」を分類することを提案する。

1.2. 本稿の構成

続く2節では認知文法において「際立ち」という語がどのような文脈で用いられるのか確認する。3節では際立ちを分類した先行研究を紹介し、その問題点について考える。4節では際立ちを何らかの言語現象に反映されるための特性とし

て4種類に分類することを提案する。5節では本稿のまとめを行い、今後の展望について述べる。

2. 認知文法における際立ち

2.1. 前景と背景

認知文法では概念化者が概念内容に対しどのような捉え方 (construal) をするかが言語に反映されると考える。捉え方を構成する要素の一つである選択 (selection) という操作では、どのような概念内容を言語化するか、どの部分を前景 (foreground) / 背景 (background) とするかが決定される。前景とは知覚されるものの中で目立つ (際立つ) 要素である。一方で背景は相対的に目立たない (際立ちが小さい) 要素である。

A manifestation in perception is the phenomenon known as **figure vs. ground**. For instance, a sudden noise stands out as figure against the ground of silence, or a small, moving cursor against the more stable background on a computer screen.

(Langacker 2008: 58)

上記のように前景と背景の対立は 図 (figure) と地 (ground) の対立に相当する。例として図1のルビンの壺と呼ばれる多義図形について考える。この図形の白い部分に注目する (前景化する) と、黒い背景に白い壺の形があるように見える。逆に黒い部分に注目すると向かい合った人の横顔に見える。このとき白い部分は背景化している。



図1 ルビンの壺

同様に、グラスに水が半分入った状況を描写するには以下のような二通りの表現が可能である。これは水に注目するか空の部分に注目するかという違いが言語形式に反映された例である。

- (1) a. The glass is half-full.
b. The glass is half-empty.

これらは選択という操作によって起こる図と地の反転である。こうした図と地の違いに関わる際立ちの対象そのものに内在する特性ではなく、概念化者によって見出される特性である。

2.2. プロファイルとベース

ある構造は、それと関連する領域の中でより注意を向けられる。このとき関連する領域はベース (base)、注意を向けられた構造はプロファイル (profile) と呼ばれる。このときプロファイルはベースに対して際立った要素とされる (Langacker 2008: 66)。プロファイルは言語表現によって直接指示される対象である。

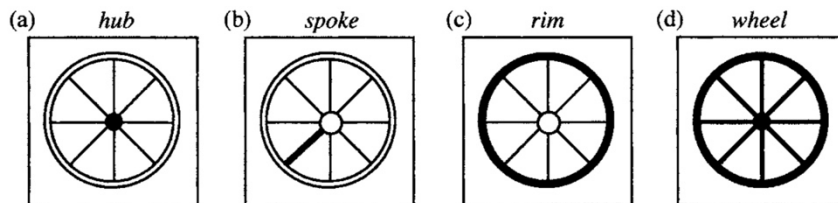


図 2

図 2 は *hub*, *spoke*, *rim*, *wheel* という語がそれぞれ同じ意味基盤のどこを前景化するかという点で異なることを示している。(1) の例と同じく、注目する部分の違いが言語表現に反映されたものである。

2.3. トラジェクターとランドマーク

プロファイルされた複数の要素の中で最も際立ちが大きいものはトラジェクター (trajector)、次に大きいものはランドマーク (landmark) と呼ばれる (Langacker 2008: 70)。具体的には主節／従属節、主語／目的語、主語／前置詞補

語の対立において前者がトラジェクター、後者がランドマークとされる。

- (2) a. The other guests all left before we arrived.
b. We arrived after the other guests all left.
- (3) a. Line A intersects line B.
b. Line B intersects line A.
- (4) a. The lamp is above the table.
b. The table is below the lamp.

(2)-(4) は命題的には同じ状況を表しているが、それぞれどちらの要素がより際立つかという点において異なる。この場合の際立ちは言語表現に現れた要素同士の関係の中で定義される。また、Langacker (2008: 321) は *the table near the door* という名詞句に関しても *the table* をトラジェクターとしており、名詞句においても主要部が従属部に比べて際立つ要素とみなしている。

2.4. 情報的際立ち

Langacker (2008) は談話の情報構造において前景化するものと背景化するものがあるとしている。例えば (5) のような発話において、主節 *I think* の情報的重要性が低い場合には音韻的にアクセントが置かれず音調も低くなる。このとき *I think* は背景化する。

- (5) I think Victoria would make a good candidate.

In sentence (1) we observe that even a “main clause” (i.e. one foregrounded in a structural sense) can be backgrounded in this manner.

(Langacker 2008: 59) (下線は筆者)

(5) で前景化し、際立ちが大きいのは従属節の内容である。これは談話の中で新たな情報を与える要素であり、聞き手の注目を引くという点で前景化される。尚、下線で示したように、Langacker (2008) はここで構造的な意味では主節は前景化していると述べており、前景／背景の対立が様々な側面で多層的に現れるこ

とを想定している。

2.5. 参照点構造

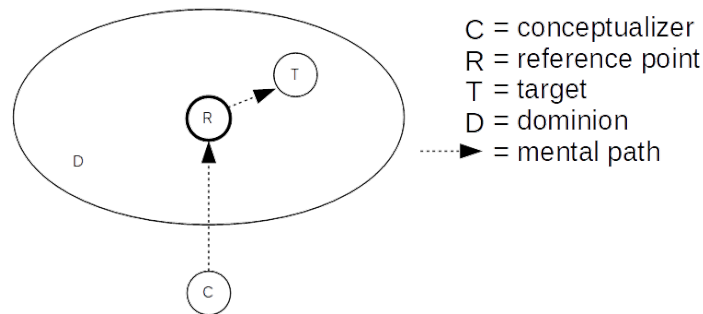


図 3 (Langacker 1993: 6)

参照点構造とは、ある概念に心的接触 (mental contact) する目的で別の概念を喚起するような言語現象を説明するためのモデルである。図 1 のように概念化者 (conceptualizer) は参照点 (reference point) を経由してターゲットに間接的に心的接触する。以下で述べられているように参照点は際立ちの大きい要素とされ、その要因については内在的な特性と文脈的な特性が想定されている。

Observe that a heavy-line circle is used for the reference point, The intent is to indicate that the reference point has a certain cognitive salience, either intrinsic or contextually.

(Langacker 1993: 6)

参照点モデルは所有表現やメトニミーの分析で使用される。所有表現においては所有者が参照点、所有物がターゲットに対応し、メトニミーにおいては媒体 (vehicle) が参照点、趣意 (tenor) がターゲットに対応する。

(6) My watch

(7) He has a gun.

(8) She bought Lakoff and Johnson, used and in paper, for just \$1.50.

(6), (7) では既知の存在である「私」や「彼」がその所有物である「時計」や「銃」

を位置付ける（或いは特徴付ける）ための参照点として機能している。(8) では人名である Lakoff and Johnson がその著作 (*Metaphors We Live By* など) を間接的に指示するための参照点となっている。

参照点能力はより知覚されやすいものをヒントにして知覚しにくいものにアクセスする能力である。よって参照点の持つ際立ちとは、こうした知覚のされやすさに対応すると考えられる。

2.6. プロトタイプ性

Langacker (1991) は意味の活性化のされやすさという意味で際立ちという語を用いている。ここでは *uncle* という語と *ear* という語を例に考える。

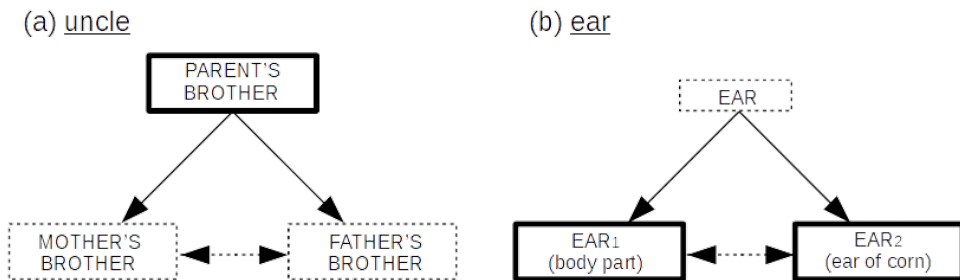


図 4 (Langacker 1991:270)

図 4 の太線は際立ちが大きいこと、点線は際立ちが小さいことを示している。*uncle* というカテゴリの事例には母の兄弟と父の兄弟が含まれるが、*uncle* という語が活性化するのはより包括的な「親の兄弟」という意味である。逆に、*ear* というカテゴリには「(人体の) 耳」という下位カテゴリと「(皮を含むトウモロコシの) 穂」という下位カテゴリが含まれるが、*ear* という語が活性化するのはこれらに共通する抽象的な意味ではなく、それぞれの下位カテゴリである。このように「際立ち」が、ある語が喚起する意味（プロトタイプな意味）として選択されやすい性質と対応付けられている。

2.7. まとめ

以上、認知文法において「際立ち」という用語がどのように用いられているか概観した。このように「際立ち」という用語は様々な文脈で使用されている。ただし、これらが同質の特性を表しているとは考え難く、それぞれの際立ちについ

てさらに詳細な検討を行う必要がある。

3. 先行研究と課題

3.1. 先行研究による分類

「際立ち」という用語を巡る混乱については先行研究でも指摘されている。Boswijk et al. (2020) は言語学の四つの下位分野（社会言語学、認知言語学、第二言語習得、意味論）において、*salience* という用語がどのように使用されているかを調査している。特に認知言語学については以下のように述べており、4 種類の際立ちについて言及されている。

According to our review, in cognitive linguistics, salience is considered in terms of:

1. Predictability: infrequent features are unexpected or surprising, which makes them stand out and more salient. On the other hand, frequent features are more easily accessible, which makes them easier to process and more salient. As such, features on both ends of the “predictability spectrum” can be considered salient.
2. Top-down salience: external sources provide a context in which something becomes salient.
3. Bottom-up salience: there is an intrinsic property of the feature that makes it more noticeable.

(Boswijk et al. 2020: 717-718)

【予測性に基づく際立ち】

予測性 (predictability) のスケールの両端はそれぞれ別々の理由で際立つことになる。予測性の高いものはアクセスが容易である。一方で予測性の低いものは驚きや意外性をもたらすという点で際立つ。Zarcone et al. (2016) によれば、物の刺激に動機づけられる bottom-up の際立ちは目立つという点で予測性の低い際立ちに対応し、談話に動機づけられる top-down の際立ちはアクセスしやすいという点で予測性の低い際立ちに対応する。

【Bottom-up の際立ち】

Bottom-up な際立ちは物自体が持つ内在的な特性による注目の引きやすさであ

る。Langacker (2008) が言うような大きな音や動くカーソルが figure となるという性質 (2.1 節を参照) は、物の特性が捉え方に影響するということを示しており、Bottom-up な際立ちに相当する。

Kövecses and Radden (1998) はメトニミーにおける媒体 (vehicle) に選ばれやすい要素として内在的特性に基づいた以下のような具体例を挙げている。これらは Bottom-up な際立ちをもった要素のリストと考えられる。

(9) 人間の経験に由来する選択性¹

- human over non-human (人間のほうが選択される)
- concrete over abstract (具体的なものが選択される)
- interactional over non-interrectional (相互作用的なものが選択される)
- functional over non-functional (機能性の高いものが選択される)

(10) 知覚的な選択性

- immediate over non-immediate (直接的なものが選択される)
- occurrent over non-occurrent (現在起きていることが選択される)
- more over less (量の多いものが選択される)
- dominant over less dominant (優勢なものが選択される)
- good gestalt over poor gestalt (良いゲシュタルトを構成するものが選択される)
- bounded over unbounded (境界のあるものが選択される)
- specific over generic (特定性の高いものが選択される)

(Kövecses and Radden 1998: 64-68, 一部抜粋)

【Top-down の際立ち】

Top-down な際立ちとは話者によって見出された際立ちでありコミュニケーションに動機づけられている。Zarcone et al. (2016) は top-down な際立ちに影響を与える要因として知覚者の目的、探索対象の特性、タスクとの関連性、直近の選択の履歴、認知的関連性を挙げている。Top-down の際立ちは外界の刺激から独立した特性であるため認知文法における捉え方 (construal) との関連も深いと考えられる。

¹ 日本語訳は谷口 (2003) による。

3.2. 先行研究の問題点

Boswijk et al. (2020) や Zarcone et al. (2016) では 予測性に基づいた際立ちや top-down, bottom-up の際立ちについて述べられていたが、これらを使った言語現象の分析はされておらず、こうした際立ちが具体的にどのような言語形式にどのように反映されるかは不明確な点が多い。

例えば人称代名詞を主語とする文があったとき、主語は人間という点で知覚的には予想性の低い、目立つ要素であると考えられる。一方で談話レベルでは topic であるために予想性が高いということも考えられる。こうした曖昧性は予測性がどのレベルで関わる特性なのかが明確でないことによる。

また bottom-up/top-down の際立ちについても、どこまでを対象に内在する特性でどこまでを話者に依存する特性とするのかは明確でない。例えば 2.6 節見たような語彙の意味の定着度という特性は対象（語彙）に内在的と考えられる一方で話者に記憶されたものであるため話者に依存する特性とも考えることができる。

4. 際立ちの再分類

2 節で見たように認知文法では様々な文脈で「際立ち」という語が使用されていた。これを分類するために本節では際立ちを構成する要素としてアクセス性、情報的際立ち、指示的際立ち、文法的際立ちの 4 種類の際立ちを提案する。

4.1. アクセス性

ある構文²、意味、言語的形式の喚起のされやすさをアクセス性という。アクセス性の高さは産出、理解におけるコストの低さでもある。これは Boswijk et al. (2020) で予測性の高い際立ちとして想定されたものと部分的に一致する。

アクセス性は更に文脈的近接性、場面的近接性、定着度、知覚的選好性という 4 つの特性に区別される。

4.1.1. 文脈的近接性

談話で現れた直近の要素は短期記憶されており、想起されやすいことからアクセス性が高いと言える。Zarcone et al. (2016) は Top-down の際立ちに影響を与える要因として「直近の選択の履歴」を挙げているが、これは文脈的近接性に相当すると考えられる。文脈的近接性は相手の発話の一部を繰り返すエコー発話 (echo utterance) などの言語現象に反映される。

² 構文文法 (cf. Goldberg 1995, 2006) における構文。

4.1.2. 場面的近接性

発話の場面(発話者の外界)における知覚しやすい要素は場面的近接性をもつ。例えば空間的に近接する(直接知覚できる範囲にある)要素は知覚がしやすい。また大きな物、目立つ形や模様なども知覚のしやすさに関わる。

(11) a. Where is the bike?

b. The bike is near the house.

(11a) に対する返答で (11b) のように家を参照物として選んだのは、大きくて目立つために聞き手と注意を共有しやすい要素だからである。このように場面的近接性は、何かの場所を位置づけるための参照物として反映されやすい。場面的近接性は言語表現そのものではなく言語表現の指示対象がもつ特性であり、Bottom-up の際立ちの一例である。

4.1.3. 定着度

定着度とは言語知識として定着している度合いである。2.6 節で見たように Langacker (1991) では活性化のされやすさという意味で際立ちという用語が使われていたが、これはある語彙の意味の定着度ということができる。更に、ある意味がどのような語彙を喚起しやすいか、またはある語がどのように発音されやすいかという点に関しても同様の特性が存在する。つまり定着度は構文、構文の意味、構文の形式がもつ特性である。

4.1.4. 知覚的選好性

Kövecses and Radden (1998) によれば、人間、動きのあるもの、まとまった形を持つものなどは際立ちが大きく、メトニミーの媒体として選ばれやすい。この傾向は物自体の内在的な特性が反映されたものであり、人間の生物としての生存戦略が発達させた知覚的な選好性に由来すると考えられる。

同様に Silverstein (1976) は主語として選ばれやすい要素の序列を提案しているが、それには「人間」、「動物」などの内在的特性に基づく項目が存在する。これらは知覚的選好性に基づいた序列であると言える。また、人間や動くものなどは関心を引きやすい対象であるために情報構造における話題にもなりやすいと考えられる³。

³ 主語と話題は強く相関することから、Silverstein (1976) の階層は話題になりや

知覚的選好性は言語表現の指示対象や意味がもつ特性であり、話者のコミュニケーション上の目的から独立した **Bottom-up** の際立ちに相当する。

4.2. 情報的際立ち

文には話題を担う部分と話題に関する情報を担う部分（焦点）がある。このとき焦点は話題に対して情報的に際立つ。2.4節で見たように、以下の文で *Victoria would make a good candidate* が新たに伝達され、強調される情報である場合、この部分が情報的に際立つことになる。

(12) I think Victoria would make a good candidate.

(Langacker 2008: 59)

情報構造も様々な形で言語形式に反映される。情報構造における話題は主語になりやすい傾向がある。また言語によっては話題はトピックマーカ（日本語における助詞「は」など）で示される。英語においては焦点は文末に置かれるという傾向（文末焦点の原則）が知られており (cf. Quirk et al 1985: 1357)、これは情報構造が語順に反映される例である。

情報構造における話題は、典型的には既知の要素である。つまり直近の談話で出現した要素や発話環境において知覚しやすい要素は話題として反映されやすいと考えられる。このことからアクセス性と情報構造には部分的な相関関係があるといえる。

また、何が話題になりやすいかという点に関しては話し手や聞き手が何に関心を持つか、どのようなコミュニケーション上の目的があるかという要因も関わる。このような **Top-down** な要因も情報構造に反映される。

4.3. 指示的際立ち

ある意味領域の中のある一部が注意を向けられている場合、その部分は指示的に際立つ。ベースに対するプロファイル、従属部に対する主要部がこれに相当する。プロファイルはその定義上、指示的に際立つ。主要部（プロファイル決定子）は従属部を含んだ全体のプロファイルを決定する要素であり、従属部に比べてより注意を向けられた部分ということができる。

尚、Langacker (2008) ではトラジェクター、ランドマークの例として主要部と

すい傾向とも概ね一致する。

従属部の関係が挙げられていたが、これはトラジェクターがランドマークに対して指示的に際立つという意味ではない。節のレベルではトラジェクターは主語、ランドマークは目的語とされるが、節全体のプロファイルを決定し、指示的に際立つのは動詞である。

4.4. 文法的事立ち

文法的事立ちは文法的な振る舞いにおける非対称性を特徴づける特性である。例えば主語は目的語や前置詞補語に対してある種的事立ちを持っており、代名詞の照応関係に関わる制約などに反映される。以下は日本語の例であるが、山梨(2000, 2017) は代名詞の照応関係における先行詞を参照点構造における参照点とみなし、参照点になりうる要素として主語>直接目的語>間接目的語>斜格表現という序列が存在するとしている。

- (13) a. 部長は彼の部下にゴルフセットをあげた。
b. *彼は部長の部下にゴルフセットをあげた。

- (14) a. 山田はフィアンセを彼女のマンションまで送って行った。
b. *山田は彼女をフィアンセのマンションまで送って行った。

- (15) a. 山田は高価な帽子をフィアンセに彼女の誕生日にあげた。
b. *山田は高価な帽子を彼女にフィアンセの誕生日にあげた。

(山梨 2017: 128-130)

(13b)-(15b) は (13a)-(15a) と同じ意味内容を伝達することを意図しているが、そのような解釈は不可能である。こうした非対称性は先行詞と代名詞の文法的事立ちが反映されたものである。

主語や目的語といった配列は部分的には意味役割によって動機づけられる。Langacker (1991) ではプロファイルされたエネルギーの流れの始点が主語、終点が目的語になるとしている。典型的には前者は動作主、後者は被動者に相当する。

In fact, once the profile is known, the assignment of participants to these grammatical relations can be predicted (or conversely). The subject is

consistently the "head" of the PROFILED portion of the action chain, i. e. the participant that is farthest "upstream" with respect to the energy flow. By contrast, the object is the "tail" of the profiled portion of the action chain: the participant distinct from the subject that lies the farthest "downstream" in the flow of energy.

(Langacker 1991: 217)

また、情報構造における話題と同様に主語の選択も Top-down な要因に影響される。例えば受動態における主語選択の交替には「何についての話をするか」という意図が関わっている。

4.5. 際立ちの多層性

以上で見てきたように際立ちは様々なレベルに存在し、それぞれ異なる言語形式に反映される。ここでそれぞれの関係を再度確認するために以下の例について考える。

(16) The bike is near the house.

Talmy (2000: 314) では (16) のような文では位置づけられる対象である *bike* が figure として前景化すると述べられている。しかし実際に何が際立つのかは際立ちの種類によって異なる。本稿で提案した際立ちの種類に基づいて (16) を分析すると以下のように異なる結果が得られる。

【アクセス性】

the bike は会話相手が直前に発した語であり、文脈的近接性がある。また *the bike* は小さくて動くという特性をもつことからより人間の関心を引きやすい、つまり知覚的選好性のある要素と言える。一方で *the house* は大きくて目立つ要素であり目印として機能していることから場面的近接性がある。

【情報的際立ち】

(16) が *bike* の場所を伝える目的で発された場合、焦点となり情報的に際立つのは (*is*) *near the house* の部分である。

【指示的際立ち】

(16) は全体として一つの節であり、そのプロファイルを決定するのは動詞の *is* である。よって指示的には *is* が最も際立つ。

【文法的際立ち】

主語である *the bike* は前置詞補語 *the house* に対して文法的に際立つ。

このように一つの言語表現の中で様々な際立ちが多層的に関わっていることが分かる。本稿の立場から言えば *bike* が際立つのはあくまで文法的際立ち、文脈的近接性、知覚的選好性という点に関してである。場面的近接性をもつのは *house* であり、情報的際立ちをもつのは (*is*) *near the house*、指示的際立ちをもつのは *is* である。このように際立ちの種類を区別することによってより詳細な分析が可能となる。

5. おわりに

5.1. まとめ

ある言語表現が産出、理解されるまでには様々な動機が複合的に関わる。そうした様々な点において一般に「際立ち」と呼ばれる特性が関与している。本稿では認知文法において用いられる「際立ち」という用語の多義性について考察し、際立ちをアクセス性、情報的際立ち、指示的際立ち、文法的際立ちの4つの種類に分類することを提案した。言語現象の詳細な分析のためには、このように各種の際立ちが何に動機づけられ、何に反映されるのかを明確にすることが必要である。

5.2. 今後の展望

現状では文法的な際立ちは照応関係に関わる制約を説明するためだけの存在である。主語、目的語、前置詞補語の非対称性が反映される言語現象が他にもあれば、一つの際立ちとしての存在により説得力が生まれると思われる。

また、先行研究で Top-down な際立ちとされたものに関しても更に検討しなければならない点が多く残る。例えば「直近の選択の履歴」という要因は本稿においてはアクセス性に分類できたが、「目的」や「タスクとの関連性」などの特性は主語や話題の選択に関わる要因と位置づけるに留まった。これらが主語や主題、メトニミーの媒体の選択に具体的にどう関わるのかは今後の課題となる。

参考文献

- Boswijk, Vincent and Matt Coler. 2020. What is Saliience?. *Open Linguistics* 6 (1): 713-722.
- Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Kövecses, Zoltán and Günter Radden. 1998. Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics* 9 (1): 37-77.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar, Vol.1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: De Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38. Berlin: De Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Silverstein, M. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert. M. W. (ed.), *Grammatical Categories in Australian Languages*: 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Sperber, D. and Deidre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition (2nd Edition)*. Oxford: Blackwell.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics, Vol.1: Concept structuring systems*. The MIT Press.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー』東京: 研究社.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2017. 『推論と照応: 照応研究の新展開』東京: くろしお出版.
- Zarcone, A., M. van Schijndel, J. Vogels, and V. Demberg. 2016. Saliience and attention in surprisal-based accounts of language processing. *Frontiers in Psychology* 7: 844.

The Polysemy of "Salience" in Cognitive Grammar

Yukihiro Tomioka

In cognitive grammar (e.g., Langacker 1987, 1991, 2008), various binary oppositions exist, such as profile/base, figure/ground, trajector/landmark, and reference point/target, where the former element is characterized as having higher salience than the latter. However, the term "salience" is used in multiple ways and these asymmetries of salience listed above are motivated by different characteristics. This paper proposes categorizing salience into four types (accessibility, informational salience, referential salience, grammatical salience) as a characteristic reflected in some linguistic phenomena.